

ヒロイン戦記シリーズ：1 a

突撃！ 戦車娘

presented by

濠門長恭



目次

1. 暴発	- 3 -
2. 惨敗	- 10 -
3. 尋問	- 26 -
4. 屈服	
5. 反撃	
6. 殲滅	
7. 凱旋	
後書き	

1. 暴発

1944年11月、東プロシアの要衝ブラニェヴォ郊外の飛行場。

滑走路には一機のJu 52 / 3m輸送機と四機のMe 109戦闘機が出発の準備をととのえていた。その脇には十両のⅢ号戦車と一台の補給トラック。

「各地のドイツ少女団から選抜されて、厳しい軍事訓練に耐え抜いてきた諸君。今こそ、その成果を見せるときである」

陸軍中佐の制服を着た男が、背後に四人の部下をしたがえて、七十人の少女たちに訓示している。

隊列の端に並んだ二十人の少女たちは、明るいカーキ色のジャケットに黒スカートの制服だが、五十人の戦車搭乗員たちは、袖無しの体操服にブルマという、晩秋にはふさわしからぬ服装だった。

「赤軍の強行偵察隊は二日の距離に迫っている。諸君はこの部隊を撃破して、五日後に到着する予定の駆逐戦車連隊と協同でブラニェ

ヴォ防衛にあたってもらいたい」

少女たちの表情は硬い。命をかけて祖国防衛の最前線に立つという栄光と恐怖、街の住民の生命が自分たちの肩にかかっているという重責——ばかりではない。

教官のいう強行偵察隊とは、五十両の戦車を中核とした大隊規模の装甲部隊だった。二個戦車小隊でまともに戦って勝てる相手ではない。地の利を最大限に利用した奇襲が絶対条件だ。その陣頭に立って臨機応変の指揮をとり、戦場の経験がまったくない少女たちの士気を鼓舞すべき五人の教官たちは、より大規模な女性機甲部隊を組織するという名目で、今まさに戦場から逃亡しようとしているのだ。「では、諸君の健闘を祈る」

教官の訓示が終わると、部隊長の号令で全員が右手を斜め前へ突き出した。

「ジーク、ハイル」

動作のそろわない、なんとなく気合の抜けた敬礼だった。

体操服姿の少女たちは、五人ずつに分かれて戦車に搭乗した。つぎつぎと戦車のエンジンがかかり、そこにプロペラの爆音が加わる。

それぞれの戦車では車長が砲塔に立って、輸送機に乗り込む教官の一団を見送っている。

暖機運転をつづける戦車群の中で、一両の砲塔がわずかに旋回した。砲身がさりげなく俯角をとる。

第二小隊三号車長エルザ・シュライバーのふくらはぎが、チョコンとつつかれた。

「照準よし……だけど？」

ヘッドセットに射撃手リリアのためらいがちなささやき声。

エルザは、薄いそばかすを散らした頬に、いたずらっぽい微笑を浮かべて。とんでもない命令を、さらりと口にする。

「フオイヤ！」

主砲が轟然と火を吐いた。輸送機の尾翼がきれいに消し飛んだ。

棒立ちになる教官たち。反射的に振り返って煙の出ている主砲に気づき、その延長線上をたどった視線は輸送機の破壊された尾部に行き着いた。彼らの反応は、ちょっとした見ものだった。ぽかんと口を開けたまま、思考停止した顔。蒼白になった顔。ゆっくりと赤く染まっていく顔。

十秒ほどもしてから、中佐が怒気もあらわに、発砲した戦車に向かって大股に歩み寄った。

エルザは、しれっとした顔で戦車からおりた。

「申し訳ありません。訓練弾を暴発させてしまいました」

「ぼ、暴発だと……！ 故意に輸送機を狙ったに決まっておる！」

エルザは否定しようともせず、ほっそりした鼻筋をちょこんと上向け、成熟しきる直前の乳房を挑発的に突き出して、教官を正面から見つめ返していた。

「ふざけおって！ 貴様は予備員へ降格だ。査問にかけて……」

一刻も早く安全な本国へ逃げようとしているときに、そんな暇はないことに気づいて口ごもる教官。

エルザが辛辣な口調で言い返した。

「どんな厳罰でも文句は言いません。でも、査問は任務が終わってからにしてください」

戦車帽から垂れたライト・ブラウンの三つ編みをひるがえして戦車に乗り込みかけ、そ

ここではじめてエルザの顔に表情が浮かんだ。驚いていた。砲塔に立てられた赤地に黒の小さなハーケンクロイツ。部隊長の標識だった。砲塔の横に、本来の部隊長であるレノーラ・シュトルツが立っていた。

「ジークハイル！」

さっきとは比べものにならないキビキビした動作で、レノーラが敬礼した。

「ジークハイル！」

第二小隊長のビアンカがそれになった。

「ジークハイル、エルザ・シュライバー！」

ほかの戦車長と制服姿の二十人が唱和した。

エルザはぽかんとハーケンクロイツを見上げ、それからレノーラを見てビアンカを見る。ビアンカがうなづいた。エルザを部隊長として認めるという意思表示だ。当然ながら、エルザの所属する第二小隊は、彼女の直接の指揮下にはいる。

エルザの顔が引き締まった。教官への反感など、忘れていた。十両の戦車と一両のトラック——五十三人の生命を預けられたことへの責任感が、彼女を奮い立たせた。

「ハイル！」

エルザが答礼すると、喝采が沸き起こった。

戦車に乗り込もうとするエルザの背中に、教官の怒声が浴びせられた。

「勝手な真似は許さん。すぐ戦車からおろろ！」

ダダダッ！

期せずして同時に、数両の戦車が機銃を発射した。誰もいない方角への発砲だったが、その意味は明白だった。教官は顔を引きつらせて、破壊された輸送機へ逃げ戻った。

エルザは自分の戦車に乗って、右手を大きく上げた。

「BDM（ドイツ少女団）教導戦車部隊、進発！」

さっと右手を振りおろすと同時に、エルザの戦車が動きだした。九両の戦車が縦隊でつづき、輸送トラックがしんがりにつく。

「イワンのポンコツ戦車なんか鉄屑にしちゃえ！」

「無理はしないでよ。三日間の足止めだけでいいんだからね」

「必ず戻ってきてよ！」

留守番の十七人が、目の前を通過していく

仲間に声をかける。

「アンジー、大好きだよっ！！」

どさくさに紛れた告白も聞こえてきたりする。

2. 惨敗

歩兵を随伴しない戦車部隊の行軍は速い。午前9時にブラニェヴォを進発したエルザたちは、午後2時過ぎには待ち伏せ予定地点に到達した。敵の先触れとなる偵察機が飛来したのは、戦車を林の中に隠してカムフラージュを終えた後だった。

「涼しくなってきた。ハッチを閉じてよ」

ハンナが通信席から砲塔を振り返った。

車長席に立って外を見張っていたエルザが、ハッチを閉めた。座席を調節して、砲塔からわずかに突き出た全周観察窓（キューポラ）に目の高さを合わせる。

狭い車体の奥には、防火隔壁で仕切られただけの三百馬力エンジンがある。エンジンを切ってからでも車内には熱がこもっていた。体操服にブルマという服装は（教官の邪心が雑じっていたのも事実だが）それなりに合理的だった。もちろん、あちこちにレバーやハンドルの突き出た車内で、ネクタイやスカートなどは論外だ。

「ところでさあ——あれ、エルミラだったんでしょ。アンジーに熱愛宣言してたのは？」

砲塔と一緒に旋回する床（バスケット）に設けられた装填手席のグレーテが、操縦席にいるアンジェラの背中に声をかけた。アンジェラはパクついていた戦闘食を喉に詰まらせかけて、目を白黒させながらミネラルウォーターの瓶に手を伸ばした。

「そんなんじゃないよ。ていうか、彼女の片想いだよ。あたしには……」

「はいはい、八歳のときに将来を誓い合ったペーターがいるんだよね」

まるっきりのガールズトーク。エルザの思いきった反抗が少女たちの屈託を吹き飛ばしたことも、大いに関係があるだろうが。それにしても、敵と生命のやりとりをする修羅場への実感がない——わけではない。完璧に奇襲が成功しても、誰ひとり傷つかないなんてことはありえないと、彼女たちも理解している。いや、何人かは死ぬだろう。だからといって、修羅場が始まる前から怯えていてもしかたがない。現実的といわれる女性の心理は、案外と戦場に向いているのかもしれない。

「トホターからムッターへ、トホターからムッターへ。敵が来たよ」

五キロほど先の風車小屋に隠れて見張っているトラック組からの無線通信だった。

「こちらムッター。どんな様子？」

「えーとね。先頭からずうっと戦車だよ。歩兵かな？ 戦車の外に何人か乗ってる」

「行軍の速度を聞いてよ」

エルザが焦れて、ハンナに小声でうながす。「敵の速度はね……測定ポイント通過………なんかダラけてるな。遅いよ………ゴール。百メートルを三十秒ちょっとだから、時速十キロでとこ。そっちまで三十分くらいかな？」

エルザはハッチを開けて立ち上がった。

「全車に通信。配置について」

砲塔の後ろにある雑用品箱から制服のジャケットを取り出して、戦車からおりる。操縦手のアンジェラを除く三人が、エルザにつづいた。迅速な行動を妨げるスカートは穿かない。

戦車の横には、カクテルシェイカーに似た形の大きな弾頭を先端に装着した長さ1メー

トルほどのパイプが並べられている。それを一本ずつ肩に担いだ。

情けない話だが、Ⅲ号戦車の50ミリ砲では敵のT34戦車の装甲を貫通できない。数十メートルの距離まで肉迫して、このパンツァーファウスト（戦車への拳骨）を撃ち込むしか撃破の手段はなかった。自分たちの戦車は逃走の役にしか立たないのだ。

エルザが直接指揮をとるのは第二小隊の五班。レノーラが指揮する第一小隊は、道路を挟んだ向かい側の林に隠れている。

エルザたちが道路脇の林に展開を終えた頃には、遠くから地響きが聞こえ始めていた。

展開の間隔は四十メートル。道路の反対側では、こちらの隙間を埋めるような形で散開している。列の端にいるエルザの位置まで敵が到達したとき、彼女が先頭の戦車を撃つ。それを合図に全員が目の前の戦車を狙えば、四十人で四十両。なんてわけにはいかないだろうけど。半数の二十五両以上を撃破すれば、敵は作戦続行不可能と判断して退却するはずだ——と、教官は言っていた。かりに十両だけでも、応急修理や死傷者の処置で何日かは

進撃が滞る。

晩秋の冷気に晒された太腿は鳥肌が立っていたが、エルザは寒さを感じなかった。

(来た……！)

一直線の道路のはるか先に、オリーブドラブ（暗灰緑色）の塊が見えた。直角を基本の構成としたドイツ戦車と違って、台形の車体に丸っこい砲塔が乗っている。

(弾がはじかれないかな？)

斜めに当たった弾は装甲を貫かずに跳ね返されてしまう。これを避弾経始という。そうさせないために、パンツァーファウストの炸薬も特殊な形状に成形されていて、爆発のジェット噴流が一点に集中するようになっている。

しかし、見るからに頑丈そうな戦車だった。(履帯を狙ったほうが確実かもしれない。息の根は止められないけれど、動けない戦車なんて鉄の箱だ)

エルザの思考は、如何にして敵戦車を仕留めるかという一点に集中していた。しかし、そうではない者のほうが多数派なのかもしれない。ハンナが持ち場を離れてエルザに駆け

寄ってきた。

「どうしよう。撃ったら、戦車に乗っかってる歩兵まで殺しちゃうよ？」

エルザは、敵の戦車を見据えたまま答えた。

「撃ったら、戦車の搭乗員は死ぬんだよ！」

ぴしゃりと頬をひっぱたかれたように、ハンナの表情がこわばった。つまり、戦闘とはそういうことなのだ。彼女は最後のためらいを振り捨てて、持ち場へ戻っていった。

そんな幕間劇のうちにも、敵の先頭が待ち伏せの端にさしかかった。

最初のひとりを通り過ぎて、十五秒後に二人目、三十秒後に三人目……気の遠くなるような長い時間をかけて、エルザに迫ってくる。

カチリ。

エルザはパンツァーフアウストの照準器を立てた。パイプを腋の下に抱え込んだが、まだ指は発射ボタンに掛けていない。

(やっぱり鉄屑にしてやらなくちゃね！)

行動の自由を奪っても主砲が生き残れば、こっちが撃たれる。いちばん効果があるのは砲塔の旋回座だ。砲塔のカーブと車体の傾斜が深い谷を作っている。近くに当たっただけ

で、勝手に食い込んでいってくれる(かな?)。

ズヒュッ……！

それは不意打ちだった。エルザにとって。

目の前を通過していく敵戦車の圧迫に耐えかねた誰かが、合図を待たずに攻撃したのだ。

ズドッ、ヴァアン！

一瞬の間をおいて、先頭から三台目の戦車が灰色の煙に包まれた。

(馬鹿……！)

つぎつぎにパンツァーフアウストが発射されていく。戦車の姿は噴き上げる爆煙に隠された。エルザの位置から戦車まで二百メートル以上。射程距離外だ。

発射筒を抱えて走り出そうとしたとき、敵戦車が道路をそれて林へ突っこんで来るのが見えた。

ピリリリリーッ！

エルザはホイッスルを長く吹き鳴らした。撤退の合図だ。

一瞬迷ってから、エルザはパンツァーフアウストを棄てた。一秒でも早く自分の戦車に駆け戻ること。それが最優先の任務だった。

ダダダッ…ダダダッ…ダダダッ…

敵の機銃は折り重なった樹木にさえぎられて、こちらまで届かない。一本や二本の樹なら押し倒して進む戦車でも、林が相手ではそうもいかない。

林が途切れて草原に変わる手前に、五両の戦車が置いてある。エルザが戻ったときにはカムフラージュは取り払われて、エンジンもかかっていた。

「早く、早く！」

グレーテがハッチから身を乗り出して叫んでいる。

「みんな、いるよ！」

エルザが搭乗すると同時に戦車は走り出した。草原をばらばらの方向へ走って、十キロ先の分岐点に集合する手筈になっている。

「来た……！」

敵戦車が林の向こう側からつぎつぎに出てきた。三十両はいるだろうか。ハッチから身体を乗り出して見張っていたエルザは、予想外にたくさんの戦車に驚いた。

(もしかしたら……)

敵は、反対側の林にいたレノーラたちには気づかなかったのかもしれない。

「えっ……！」

エルザは声に出して叫んでいた。敵がぐんぐん距離を詰めてくる。

「敵のほうが速い！」

そんなことも教官は教えてくれなかった。

自分たちは捨て駒にされたのではないか。

ちらっと考えて、それはすぐに忘れた。絶体絶命の危地をどうやって脱出するかを考えなければならない。

「砲を後ろへ向けて。走りながら撃つ」

「当たりっこないよ」

当時の戦車には弾道計算コンピュータもジャイロ安定装置もない。砲撃のときは静止しなければならない。

「威嚇だよ。すこしは速度を落とすかも」

ぐるりと砲塔が旋回して砲身がゼロ距離射撃の俯角になる。

「狙いなんか適当でいいから……フオイヤ！」

ドゥーン！

敵戦車群の手前に着弾して、ささやかな土煙が立った。

「瞬発信管に換えて！」

しかし、一発の不発弾は敵に脅威を与えたようだった。

「停まった。今のうちに……」

エルザの言葉が凍りついた。

敵戦車の砲塔が旋回して主砲が下がり……76ミリの真っ黒な穴が、ぴたりとこちらに向けられた。

「右旋回、急いで！」

わずかに戦車の向きが変わったとき。

主砲が赤黒い煙を吐いた。同時に、エルザの左五メートルあたりで土煙が舞った。

ズド、ヴァッガーンン！！

エルザの左後方を走っていた一号車が真っ赤な煙に包まれた。煙は、そのまま大きな炎になった。炎の中から脱出する人影はない。

「ビアンカ！」

エルザは車長の名前を叫んだ。が、今は仲間の死を悼んでいる時ではない。

「停車！ 降伏する。全車に伝えて。抵抗の意志がないことを示すために、停車したらすぐ外へ出て」

エルザは戦車から飛びおりた。拳銃を吊っているベルトをはずして、ジャケットを脱い

だ。白旗はないけれど、ジャケットを振れば意味は通じるだろう。

ズド、ヴァッガンン！！

再び爆発音。五号車が側面を破壊されていた。

ドーン、ドドーン！

積んでいた砲弾が誘爆を起こした。五人とも即死だ。

(もし、わたしが撃たなかったら……)

これは戦争なのだ。こちらが撃たなくても敵は撃つ。それはわかりきっているのだけれど——敵の砲撃は自分の一発が誘い水になったのではないかという疑念が、エルザを苦しめた。

二号車と四号車が停まって、搭乗員がおりてくる。ところが……

ズド、ヴァッガンン！

四号車が撃たれた。空中高く吹き飛ばされる肉体を、エルザははっきりと見た。

「なぜ……降伏してるのがわからないの?!」

「エル、あっち！」

ハンナが正面の敵戦車を指さした。砲口が

こちらへ向けられている。

エルザを含めて全員が恐怖に凍りついた。足がすくんで動けない。

エルザは、とっさに戦車帽をむしり取った。だけでなく、体操服まで脱ぎ捨てた。ブラジャーは着けていないので、まったく垂れていない半球型の乳房が露出した。

「エル……？」

ハンナが内心で疑ったように、エルザは気が狂っていたのかもしれない。

「撃たないで！ 撃たないで！ 撃たないでよーっ!!」

半裸の身体を敵戦車に向けて、両手を振りまわしながら何度も飛び跳ねた。傾いた陽光を浴びてライトブラウンの三つ編みが躍り輝き、乳房がたぷんたぷんと上下に揺れる。

それは――敵の戦意をくじくにはじゅうぶんな光景だった。

四両の敵戦車がゆっくり動き出して、二両ずつに分かれてエルザたちと四号車のアデーレたちに向かう。二十メートルほどの距離で止まると、一両から二人ずつがおりて、短機関銃を構えながら近づいてきた。

ともかく、この場での死はまぬがれた。膝が砕けて、その場にへたり込んだ。と同時に羞恥心が甦る。体操服に手を伸ばそうとする。

タタタン！

体操服がちぎれて吹っ飛んだ。

敵兵はエルザに近づくと、両側から腕を取って強引に立ち上がらせた。

「задержка (手を上げろ)！」

エルザがきよとんとしていると、手首をつかまれて頭の後ろで組ませられた。

(うう……恥ずかしいよ)

自分の意思で(では、ないのだけれど)裸体を男たちの目に晒す行為は、入浴を覗き見られることなんかとは比べものにならないくらい恥ずかしい。

「хорошие сиськи (素敵なおっぱいだぜ)……」

敵兵の手が胸に伸びてきた。

「いやっ！」

とっさに胸をかばいながら身をよじった。

バシッ！

容赦のない平手打ちが身をよじった側から叩きつけられた。

「痛いっ！」

倒れかかった身体を抱きとめられ、そのまま羽交い絞めにされる。

「задержка（手を上げろ）！」

手首をつかまれて、乳房から引き剥がされた。言葉の意味をおぼろに理解して手を頭の後ろで組むと、敵兵は満足そうにうなずいた。

「когда сопротивляться, я стреляю（抵抗すると射つ）」

短機関銃を乳房に突きつけて、グリグリと銃口をねじ込んだ。

「くうう……」

すこしでも身体を動かしたら、銃を暴発させてしまうかもしれない。エルザは羞恥と乳房の痛みを耐えて、じっとしていた。

敵兵は左手でエルザの乳房を鷲づかみにしてもぎ取ろうとでもいうようにこねくりまわした。

「きゃああっ……！」

「いやあ！」

我にかえって悲鳴の方角を見ると、四号車の五人がジャケットを剥ぎとられて、敵兵に蹂躪されていた。胸だけでなく、ブルマの中

に手を突っこまれている娘もいた。

その光景はこちらの敵兵にも新たな獣欲を起こさせたようだった。四人はエルザをうちやっつて、それぞれが新しい獲物に向かった。
(……………)

背後からは八丁の車載機銃が狙っている。エルザは両手を頭の後ろに組んだまま、仲間が凌辱されるのを傍観するしかなかった。

「Получить на том же рисунке с ней (同じ格好にしてやるよ)」

四人はジャケットだけでなく体操服まで脱がされて、エルザと同じように両手を頭の後ろで組まされた。逆らえばどうなるか、たったいま目の前で見せられている。悲鳴すら我慢して、身体を弄ばれるのに耐えていた。

「Не шутка. Вернись (遊ぶんじゃない、戻ってこい)！」

戦車から厳しい声が投げつけられて、敵兵はハッと我にかえったようだった。

「Уолк (歩け)！」

敵兵は銃口で――背中ではなく尻の割れ目をつついて、エルザたちを戦車のほうへ追い立てた。エンジンルームのある戦車の後部へ

五人ずつで座らせると、手首を後ろで縛った。

「死んじゃったんだ……十五人も」

リリアが縛られながら、うつろにつぶやいた。それを合図のように、ハンナとグレーテがすすり泣きを始めた。

エルザは泣かなかった。泣けなかった。誰が指揮をとっていても結果は同じ——いや、とっさの機転がはたらかなければ、ここにいる全員が撃ち殺されていたかもしれないが、それでも、十五人の死は部隊長である自分の責任だと感じていた。

座らされた場所の鋼板はエンジンの熱で焼けていた。ブルマと薄いショーツの生地は、肌を守る役には立たなかった。すぐに火傷をするほどではないが、少女たちを苦しめるにはじゅうぶんだった。しかも走り出してエンジンの回転が上がると、両側のラジエータから熱風まで吹きつけてきた。もし一時間も乗せられていたら、低温火傷と脱水症状におちいっていただろう。

実際には十五分ほどで敵部隊の集結地へ戻った。そうして、拷問と凌辱の幕が切って落とされるのだった。

3. 尋問

草原の一面にトラック部隊がかたまっていた。その隣では幾つものテントが張られているところだった。予定より早く野営して、損害の回復を図るつもりらしい。

戦車はトラック部隊をはさんでテント群の反対側に、一個小隊五両ずつが横隊を組んで停止した。六両、七両と多いところは、中隊直属の戦車が所属している小隊。三両の列が二箇所と、四両の列が三箇所。合計七両の欠損が、エルザたちのあげた戦果だ。しかし、トラック部隊の中ほどに、小破した三両の戦車がいる。明朝までには修理されて、戦列に復帰するだろう。十五人の少女たちの犠牲は、わずか数時間の無意味な足止めにしかならなかったのだ。

エルザたちは戦車から（役得とばかりに身体じゅうをまさぐられながら）抱きおろされ、テント群の中へ連行された。

「あ……！」

赤十字の旗を掲げたテントの前に四人の仲

間たちが座らされていた。第一小隊一号車、レノーラたちの班だった。ネリイの姿がない。テントの中で治療を受けているのだろうか。

彼女たちは辱めを受けた様子はなく、四人ともジャケットを着ていた。けれど、ヴェラは右腕を肩から吊っていた。彼女を抱いてなぐさめているレノーラは、左の太腿に巻いた包帯が赤く染まっていた。

「ええっ!？」

エルザたちに気づいたフローラが素っ頓狂な声をあげた。半裸の仲間が縛られて十人もつれてこられたのだから、無理もない。フローラは、見てはいけないものをみてしまったとでもいうように目をそむけた。

エルザはエルザで、傷ついた仲間を正視することができなかった。

「садиться (座れ)」

背後から胸をつかまれて下へ引っ張られた。

「やめて……」

抗議はしたが、さからわなかった。ぶたれた頬の痛みは引いていても、恐怖はまだ残っている。さらに強く乳房を押さえつけられて、腰が砕ける。エルザたちは、レノーラのそば

に座らされた。

「射たれたの？」

エルザが小声でレノーラに訊ねた。

見張の敵兵は熱心にエルザたちを見つめているが、おしゃべりを止めさせようとはしなかった。捕虜同士が何事かを示し合わせるとか、そういうことには気がまわらないのかもしれない。

「撃ってやったんだよ！」

フローラがかわりに答えてくれた。

「……？」

彼女の説明によると、第一小隊は走り出すとすぐ敵戦車に囲まれそうになった。レノーラの班は戦車からおりて、まだ持っていたパンツァーフアウストで敵を仕留めた。そこに生じた突破口からほかの四両を逃がしたが、自分たちは逃げ遅れた。第二小隊のような戦車同士の追撃戦にはならず、歩兵が追いついてきて銃撃戦になった。といっても、敵は数十丁の小銃と短機関銃、こちらは五丁の拳銃。

一瞬で殲滅されても不思議ではないのだが、この時点で、敵兵は相手が女性だと判別していたらしい。威嚇射撃を繰り返して、レノー

ラたちを生け捕りにした。それでもネリイは戦死して、ヴェラが右肩を射ち抜かれ、レノーラも脚に軽傷を負った。

話を聞いているうちにエルザは、ヴェラとレノーラの傷を包んでいるのが包帯ではないことに気づいた。それを訊ねると、レノーラがちらっとジャケットをはだけた。体操服を着ていなかった。

「やつら、あたしたちの怪我なんか、知ったこっちゃないんだよ」

ヴェラが肩の痛み顔に顔をしかめながら、しだいに増えてきた見物人たちに憎しみの目を向けた。

「レノがシャツを裂いて、包帯の代わりにしてくれたんだ」

「ろくに消毒していないから、破傷風にならなければいいんだけどね」

レノーラが心配そうにつけ加えた。まったく消毒しなかったとは言わなかった。彼女の口元が、うっすらと赤い。傷口をなめてやったのだろう。

自分だったら、とっさにそこまでの判断と行動ができたかどうかと、エルザは自問した。

反撃も、そうだ。パンツァーフアウストを棄てずに、あの場にとどまって、追ってくる敵戦車の先頭を攻撃していれば、最悪でも犠牲は五人、もしかしたら自分だけですんでいたかもしれない。

調子に乗って部隊長を引き受けたのは間違いだったと、エルザは痛恨に打ちのめされた。

三十分ほども晒し者にされていただろうか。五人の敵兵がエルザたちの前に立った。将校が二人と下士官らしいのが三人。ちぢれた茶色のあごひげがもみあげまで伸びている太った男は、金筋のはいった星ひとつの階級章を付けている。偉そうな態度から判断して少佐だろう。もうひとりの生っちょろい男は、ベタに星ふたつ。中尉か。

「**Встаньте**（立て）」

見張の兵が小銃をエルザたちに向けて、銃口を跳ね上げる仕種をした。立てと言っているらしい。

正面に二人の将校が立ち、三人の下士官がエルザたちを囲んだ。

「ドイツにも女性兵士がいるとは知らなかつ

た。誰が指揮官だね？」

生っしろい中尉が流暢なドイツ語で訊ねた。

「わたしです」

躊躇することなく、エルザが前へ出た。

「名前は？」

「エルザ・シュライバー」

「所属と階級は？」

「わたしたちは正規の軍人ではありません。ドイツ少女団から選抜されて軍事訓練を受けていました。年齢による区分はありますが、とくに階級というものはありません」

隠す必要のない事柄ばかりだったので、エルザは素直に答えていった。

エルザの言葉を、中尉が翻訳して上官の太った少佐に伝えている。少佐がエルザに向かって言葉をかけたが、もちろん意味はわからない。

「ブラニェヴォの兵力は？ 戦車と大砲の数は？」

この質問に答えるわけにはいかなかった。守備部隊は敗残兵を寄せ集めた一個大隊だけ。火力は非力なⅢ号戦車が四両きりで、T34戦車に通用する88ミリ高射砲はゼロ。パン

ツァーフアウストは、ありったけを使ってしまった。そんなことを知られてしまえば、四十両以上のT34は全速力で進撃するだろう。敵襲を警戒して戦車に同乗させている歩兵をトラックに移せば、行軍速度は倍になる。

「そういった質問に答える義務はありません」

エルザは気丈に相手を見返した。

「**исправить ее тело**（押さえつけておけ）」

中尉が、エルザの背後にいた下士官に声をかけた。

「ダー」

エルザはいきなり羽交い絞めにされた。

「いやっ……やめて！」

中尉の右手がゆっくりと肩の高さに振りかぶられる。

バシッ！

頬に衝撃が走って、口の中に鉄臭い味が広がった。

バシッ！

反対側の頬も手の甲で叩かれた。

「黙っていると、もっと痛くなるぞ？」

がしっと両方の乳房をつかまれた。乳房の

付根にぎりぎり指が食い込んでくる。

「い、痛い……」

そのまま、九十度以上もねじられる。

「ほ、捕虜への拷問は……ハーグ陸戦規程で禁じられています」

ふふんと、中尉は薄く嗤った。

「我が祖国は、そんなブルジョアジーの馴れ合いになどは加盟しておらぬ」

ふっと、乳房への圧迫が消えた——つぎの瞬間。

ドスンと、腹を殴られた。

「ぐえっ……！」

腹の中で爆弾が破裂したような激痛。目の前がすうっと暗くなり、息が詰まった。

ドスン、ドスン。立て続けに殴られる。

「**возвращается**（はなしてやれ）」

腋の下から手を抜かれると、エルザは倒れこむようにうずくまった。

中尉が背後にまわって、ブルマとショーツをずり下げる。エルザは抵抗するどころか、抗議の声もあげられない。

「やめて！」

レノーラが駆け寄って、中尉を突き飛ばし

た。尋問ショウに見とれていた見張が、あわてて彼女に銃口を向けた。

「Я буду готовить эту суку（この牝犬は俺が料理してやる）」

中尉が手を振って、兵士を下がらせた。

「元気なお嬢さんだな。名前は？」

レノーラはエルザを背中にかばって無言。敵意を剥き出しにして、中尉と、その後ろにいる少佐を睨みつけている。

中尉が拳銃を抜いた。エルザたちに支給されたワルサー P P K の倍はありそうな、ごついトカレフ軍用拳銃だ。それを腰だめで無雑作に射った。

パン。弾丸はレノーラでなく、うずくまっているエルザの膝すれすれの地面に射ちこまれた。

「おまえの名前は？」

銃口がわずかに上げられて、エルザの胴体に向けられた。

「……レノーラ・シュトルツ」

レノーラが口惜しそうに答えた。

「わたしが正規の部隊長です。エルザは、この作戦の指揮を臨時にお願いただけ。尋問

するなら、わたしにしなさい」

「Она подбитый танк Соколова（こいつが、ソコロワのタンクを破壊したんだ）」

尋問に随伴してきた下士官のひとりが、レノーラに指を突きつけた。きつい口調の中から、エルザはタンクという単語を聞き分けた。

わかっているとでもいうように中尉がうなずいて、レノーラに向きなおった。

「では、お望みどおりに、おまえを尋問しよう。まずは、そこの娘と同じ姿になってもらおう」

「な……?!」

レノーラが絶句していると、中尉は拳銃を握っている腕を水平に上げた。エルザを射殺するという脅しだった。

レノーラが下唇を噛みながらジャケットを脱いだ。体操服は包帯の代わりにしてしまったので、下にはなにも着けていない。エルザに比べると小ぶりの乳房が、いきなり衆目に晒される。

「ほう……裸になりたかったのかな？」

中尉にからかわれて、レノーラの顔が恥辱と怒りに染まった。

「手を後ろにまわせ」

レノーラを指さした下士官が、その手首を縛った。よほどきつく縛ったのだろう、レノーラがかすかに呻いた。

「では、尋問のつづきだ」

中尉はレノーラに近づくと、足払いをかけた。肩から地面に叩きつけられたレノーラに後ろ向きに馬乗りになって、ブルマに手をかける。

「ブラニェヴォの兵力を訊ねているところだったな？」

もちろん、レノーラも答えない。ささやかな抵抗は、思いもかけない場所で獣欲の対象を手中にした男を、より残虐な行為に駆り立てる役にしか立たないとは――男性経験のない少女にわかるはずもなかった。

中尉はブルマとショーツを一気に膝まで引きずりおろした。

「くっ……」

そうされることくらいは、レノーラも予測していたのだろう。歯を食いしばって凌辱に耐えている。

もちろん、男の行為がそれだけですむはず

もない。下士官に命じてレノーラの靴を脱がせた。それを手に持って。

バシッ！

したたかにレノーラの尻を打った。

「きゃあっ！」

痛みと驚愕でレノーラが悲鳴をあげた。

バシッ、バシッ、バシッ！

靴が叩きつけられるたびにレノーラの尻肉がひしゃげて弾む。

「こんなことをしても無駄よ！ 絶対に白状なんかしないんだから！」

仲間が拷問にかけている光景を前に、座らされている十二人の少女たちは震えていた。目をそむけて歯を食いしばっている者、隣の少女の肩に顔を埋めて泣きじゃくっている者、抗議の声をあげる勇気までではなくても憎悪の眼差しで敵兵を睨みつけている者。

下士官が二人がかりでレノーラを仰向きにひっくり返した。ブルマとショーツを脚から抜き取って膝をつかみ、両脚を大きく割り開いた。いっそう残虐な拷問が始まろうとしているのは明白だった。

「いやあ……やめてえ！」

脚を閉じようとしてもがくレノーラ。太腿を包んでいた布切れがほどけて、十センチほどの傷口から新たな血が滴った。

「白状します！ 彼女を許してあげて」

腹の痛みを我慢して、エルザが叫んだ。

「今は、街の守備兵力は一個大隊だけです。でも、駆逐戦車連隊が明日には到着します。あなたたちの戦力じゃ勝ち目はないわ」

駆逐戦車というのは、戦車から砲塔を撤去して、より大口径の砲を搭載した、一種の自走砲だ。車高を低くできるので避弾経始も改善される。土台が戦車だから機動性もよい。砲塔がないから射界は限定されるが、正面の敵に対しては滅法強い。守備についての駆逐戦車を撃破するには、最低でも倍の戦車が必要だ。員数を減らした戦車大隊での交戦は自殺行為に等しい。どんなに猪突猛進型の指揮官でも、後続の本体と合流する選択肢を選ぶだろう。

しかし、通訳されたエルザの言葉を聞いた少佐は、蒼ざめるどころか冷笑した。中尉に向かって早口でなにかを言ってから、見物の兵士たちに向かって顎をしゃくった。

「偵察機からの報告では、ブラニェヴォの半径二百キロに機甲部隊の影はない。もうすこしもっともらしい嘘をつけ」

通訳の中尉は兵士を見わたして、五人を呼びつけた。小声で短くささやき、エルザに親指を向けた。

第二次大戦において、すべての交戦国の中でソ連兵の残虐さは図抜けていた。ベルリン陥落時には十万人の婦女子が強姦されたともいうし、ポーランド将校の大量虐殺や満州における組織立った民間人の虐殺は、真贋の曖昧な南京大虐殺とは異なり、完全に歴史上の事実として記録されている。

その残虐性の発揮を上官に奨励されて、躊躇する兵などいない。

「ウラーッ！」

五人は我先に、エルザへ向かって突進した。

ようやく立ち上がりかけていたエルザは、たちまち五人に組み敷かれた。

「いやあ！ やめてっ……！」

かろうじて腰を隠していたブルマが引きちぎられ、ショーツが粉々にされた。ばたつかせた脚をつかまれて、膝が肩につくほど折り

曲げられる。

「い、痛い……」

のしかかってくる男の体重が加わって、背中で重ねられた手首に痛みが走った。そこへ、乾ききった処女穴に指をこじ入れられる苦痛が加わった。

「**Не ласки, всего лишь вставить**（濡れてないから挿れにくいぜ）！」

男がいったん腰をひいて、あわただしくズボンを下げる。すでにいきり立っている陰茎に唾をつけて、強引にねじ込んだ。

「ひぎいーっ！」

股間から脳天までまっぷたつに引き裂かれたような衝撃。なにがなんだかわからないうちに、エルザは処女を奪われていた。

「痛い、痛い……助けて！」

エルザの悲鳴は男をひるませるところか、ますます獣欲を煽り立てた。

ぎちぎち、ぎちぎち……

潤いのない穴が何度も深くえぐられる。エルザの股間が血まみれになり、その血が穴を潤した。自身を傷つける心配のなくなった男は、ますます荒腰を使う。

ぐじゅぐじゅ、ずにゆる……

「あ……や……もう……許して」

涙でぐしょ濡れになった顔で、自分を犯している男に懇願するエルザ。

「Вставай на женщину. Я использую ануса
(女を起こせ。俺はケツの穴を使うぜ)」

見物している兵士が声をかけた。男はエルザの背中と腰を抱えて、ごろりとあお向けになった。

エルザは、男の上に乗せられた。

「はあ、はあ……」

一時的にせよ抽挿がやんで、エルザはほっとした。が、その哀しい休息は十秒とつづかなかった。

声をかけた男が結合部に手を伸ばして、指をエルザの鮮血で濡らした。ぐいと上体を押し倒して、その指で尻たぶを割った。

(な、なにを……?)

排泄孔を指でえぐられて、エルザは苦痛よりも恐怖を感じた。とまどっているうちに背後から腰をつかまれて、排泄孔に熱い硬直があてがわれた。

(え……?!)

相手の意図を理解したのは、めりめりと排泄孔を貫かれてからだった。

「うぎゃあああーっ!!」

処女膜を破られたとき以上の激痛が下半身で爆発した。

この男も悲鳴を愉しみながら、ガンガンとエルザを突いた。

エルザの身体は彼女をサンドイッチにしている男たちの間で前後に激しく揺すぶられ、そのたびに下半身に激痛が走った。前が痛いのか後ろが痛いのかさえ、エルザにはわからなくなっていた。

「あう……う、うう……」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、意味もなく呻いているエルザ。これほどの苦痛も屈辱も、エルザは想像すらしたことがなかった。これ以上の辱めなど、あるはずもなかった。しかし、それはあったのだ。

エルザは三つ編みの髪をつかまれて、顔を上げさせられた。涙でにじんだ視界に、赤黒い醜悪な肉棒が迫る。

「Откройте рот. Если жевать пенис и убить вас (チ●ポを啜えろ。噛んだら殺すぞ)」

怒張が唇になすり付けられると同時に、ごりっと拳銃が頭に突きつけられた。

「男性器官を口に含め。噛みついたら射殺する」

通訳の中尉が、無機質な単語で翻訳をする。

性知識に乏しいエルザにも、言葉の意味は明白だった。男の――敵兵の陰茎を口に咥える。そのおぞましさにエルザは慄えあがった。けれど、もっとひどい目にあわされるのを覚悟で要求を拒む勇氣はなかった。

エルザは目を硬く閉じて口を開けた。饅えた汗と海藻と腐った肉をミンチにして混ぜ合わせたような悪臭が鼻をついて。ぐぼっと、口中いっぱい肉棒が突き立てられた。

ぐにゅっぐにゅっぐにゅっ……

喉の奥深くまで肉の杭が穿ちこまれる。エルザは吐き気に苦しめられながら息を止めて、口腔の凌辱に耐えた。

ぐちゅっずにゅっぐぼっ……激しく揺すぶられる頭とはまったく異なるリズムで送り込まれる、下半身の激痛。

「んぶう……ぶ、むう……」

動物のような呻き声。いっそのこと。口中

にねじ込まれた肉棒を噛みちぎってやろうかと思う。そうすれば、こめかみに押しつけられた拳銃が瞬時に彼女を苦痛から解放してくれるだろう。

(……わたしは部隊長なんだ！)

その思いが、エルザを押しとどめた。自分が死ねば、敵兵の獣欲は仲間に向けられる。みんなを自分と同じ目にあわせるわけにはいかない。

(でも……わたしが犠牲になっても……)

レノーラたちが見逃してもらえとは、エルザも思っていない。すぐにでも、同じように強姦されると、それくらいは想像がついた。けれど。それを見届けるだけのためでも。自分ひとりが安息に逃げ込むことはできないのだと、エルザは自覚していた。

「うおおっ！」

口腔を犯していた男が短く吠えると、腐ったヨーグルトに漂白剤を混ぜて熱したような液体が喉の奥にあふれた。

ほとんど同時に。

「Тяжелые затяжки (締め付けやがる) ……！」

直腸にも熱い奔流が注ぎ込まれた。

「うげええ……」

エルザは苦い胃液とともに、口中に溜まった精液を吐き出した。

そんなことにはお構いなしに。下から貫いていた男が腰をつかんで揺すぶり、己の欲望をエルザの奥深くに吐き出した。

エルザはぼろ布のように投げ出された。血まみれの下半身と精液の垂れる唇もそのままに、死んだように横たわるエルザ。中尉に指名されたものの、ただ見ているだけしかできなかった残る二名の兵士が、彼女に襲いかかった。

「やめて……！」

レノーラの悲痛な声。

「なんでも白状します。だから……エルをもう虐めないで！」

二名の兵士に開脚を強制された姿で——股間をくじられたり乳房を蹴られたりはしたけれども——放置されていた彼女は、中尉の関心が自分に向けられるだろうことを覚悟の上で叫んだ。

「駆逐戦車連隊がブラニエヴォに向かっているというのは、ほんとうです。でも、到着は

五日後です。今のわたしたちには、生き残った戦車が四両あるきりです。パンツァーフアウストも、もうない。あなたたちに対抗できる兵力は……なにもないのよ！」

泣き崩れるレノーラ。

中尉が通訳すると、最高指揮官の少佐は満足そうにうなずいた。明日に備えて英気を養っておけという意味の言葉を投げて、エルザたちに背を向けた。

わああっと歓声をあげて、兵士たちが十四人の少女に殺到した。